

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

元「週刊少年チャンピオン」編集長

サポニスト
ですよ

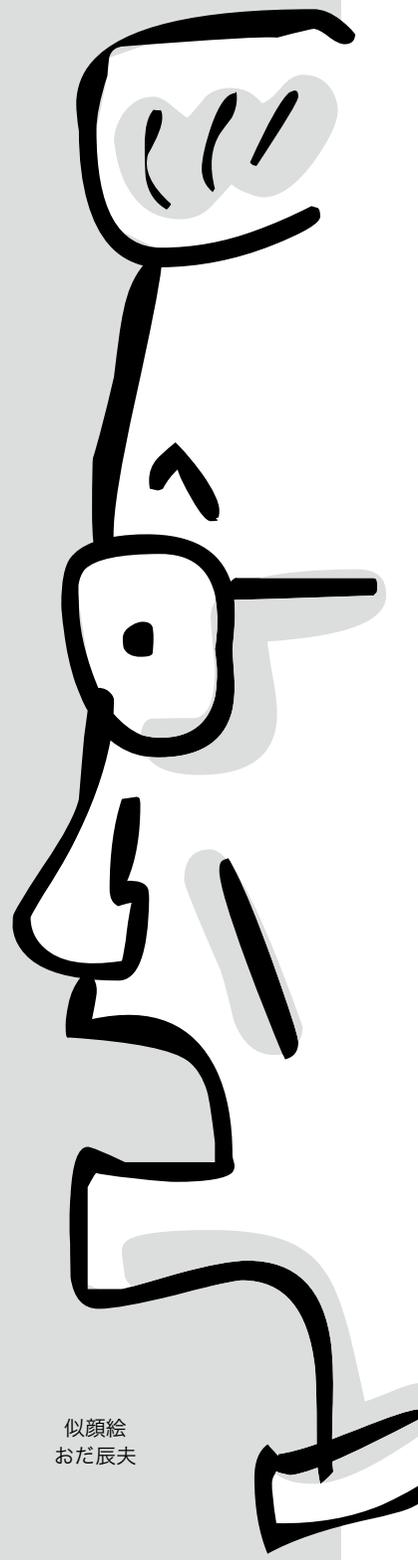
阿久津邦彦



伝説の編集者・壁村耐三氏に
徹底的に鍛えられた新人時代

秋田書店に入ったのは、25歳のときです。大学には7年もいたからね。新卒ギリギリというか。たまたま知り合いがいて、入れてもらったような感じですよ。当時はまだ学生運動の残り火がくすぶっていて、「とめてくれるなおつ母さん」の東大駒場祭のポスターとか、藤圭子が「少年マガ

ジン」の表紙になったりとか、そういう時代。社会に出て何かをやるうという意識はまったくなかったなあ。食えればいいや、と。本は好きだったけど、漫画にはそれほど思い入れはなかった。まあ「少年」とか「少年画報」を読んでいたぐらいかな。でも、当時の大学生って、漫画を読むと大人からひんしゆくを買ったじゃないですか。まさにそんな漫画を読んでいる大学生の意識のまま秋田書店に入ったことを覚えています。



似顔絵
おだ辰夫

プロフィール

1944年、埼玉県出身。早稲田大学に7年在学したあと、69年秋田書店に入社。「まんが王」「漫画HOT」を経て、故・壁村耐三編集長のもとで週刊少年チャンピオン」の編集者として活躍。山上たつひこ『がきテカ』、鴨川つばめ『マカロニほうれん荘』などの大ヒット作を手がけ、同誌を250万部まで伸ばす。81年から83年まで編集長をつとめる。以降、「ブレイクコミック」「ファミコンチャンピオン」などを手がける。定年退職後、フリーの編集者として活動するかわら、博物館で展示解説などのボランティア活動もおこなっている。

そこで出会った壁村耐三さんという編集者が素晴らしい人で、彼の下で好き勝手やらせてもらったんですよ。壁村さんは、手塚治虫さんの原稿を破ったと言われたりするような伝説的な編集者だったんだけど、それは単にその場面を見なかった人とか、経過を知らない人がことさらに吹聴しているだけ。本当に漫画が好きでし

たね。『ブラック・ジャック』で手塚さんを魅了したのは壁村さんですよ。藤子不二雄(A)さんもそう。『魔太郎がくる!!』でね。あと石井いさみさんも『750ライダー』で活躍された。どこに行っても壁村さんを知らない人はいかなかったんじゃないかな。赤塚不二夫さんとも親交があった、タモリを赤塚さんと発見したのも壁村さん。彼のイグアナの芸や、四人同時外国人麻雀を見た覚えがありますよ。

壁村さんは、見た感じすごくアバウトな人な

んですけど、編集の基本を徹底的に教えてくれる人だった。最初にやらせてもらったのは「まんが王」。当時あまり売れてなくて、終末期にあつたんだけど、その「まんが王」を使って僕らを育ててくれた。僕はまだ25歳だったし、副編集長は3年目だったけど同い年だったからね。そんな若造ばかりだったから、雑誌作りはまるで知らないわけ。そこで、漫画の両端にある柱をひたすら作らされました。その頃の「まんが王」は500ページぐらいあつたし、別冊付録も200ページはあつたからね。柱を作るだけでとんでもない数になるわけ。それが僕ら新人の仕事でした。壁村さんは僕らが作ったものをいちおう目は通すんですけど、そのままスルーしてくれるんです。それで雑誌が出来上がると、会社近くの飲み屋に呼

び出されてボロクソに言われました(笑)。

よく言われたのは、読み手は小学生なんだから、お前みたいに難しい言葉を使うのはおかしいだろう、と。あと、漫画の見開きページがあるとするじゃないですか。子供はそれを3秒で読むっていうんだよね。当時の漫画ってページ4段だから、見開きだと16コマになる。そのコマ数で表現したいことはたくさんあるだろうけど、本当に表現したいものは1つか2つだろうと。だからその強調したいところを大きくするんだと。大きいコマを使った分、他のコマが減るから、どうやって省略していくかを考えろと。そう漫画家に言えば、ぐうの音も出ないからって(笑)。

だいたい漫画家っていうのは、自分の描きたいことしか描きたくない連中なんだから。でも、い

ちばん描きたいところを探してやって、それを読者の目に引つかかるようにするのが、お前の仕事だと。それを酔っぱらって言われるわけ(笑)。雑誌が出ない日でも毎日呼び出しですよ。当時、水道橋にトリスバーがあつて、そこが編集部員のたまり場になっていて、そこで他愛のない話をしてるうちに、じゃあ今度これ行こうとか。そんな感じ。これは、会社が飯田橋に移つたあとにも「紅」というバーで続きました。



「少年チャンピオン」の全盛期を担う
楽しいと思えることしかやらなかった

そのあと壁村さんが「少年チャンピオン」の編集長になって、僕も配属されるんだけど、少年漫画誌としては後発だし、「マガジン」「サンデー」は、はるか先。「ジャンプ」にも相手にされていなかった。だからというわけではないけ

ど、あまり他誌を追いかけると意識はなかったなあ。もつと身近な野望がありましたけどね。全国のラーメン屋と喫茶店に「チャンピオン」を置こうと。目標100万部とか、そんな考え方はしなかった。

壁村さんのおかげで、ほんと好き勝手にやらせてもらいましたよ。いろんな漫画のイロハを覚えてもらいながらね。いつのまにか壁村さんのペースになつていたんだろうけど、自分の好きな漫画家と好きな漫画を作る。そればかり。壁村さんに反対されるということはほとんどなかったかな。

ジョージ秋山さんの『花のよたろう』の担当に途中からなつただけで、ちつとも面白くなくて(笑)。だからジョージさんと話して、ギャグか

ら人情モノに変えてもらったりしました。あと、つのだじろうさんの『泣くな！十円』というギャグ漫画。あれもつまなくてさ。それで、つのださんの家に行ったら、オカルトとか化け物が大好きだっていうことがわかって。それで『恐怖新聞』を始めてもらったんですよ。そっちのほうが面白いと思ったからそうしてもらったただけでね。

山上たつひこさんの『がきデカ』も僕が担当しました。あれも最初は他愛のない話から始まったんですよ。当時山口百恵と風吹ジュンがアイ

『青い空を、白い雲がかった』
あすなひろし著 秋田書店刊



『恐怖新聞』
つのだじろう著 秋田書店刊



『がきデカ』
山上たつひこ著 秋田書店刊



『マカロニほうれん荘』
鴨川つばめ著 秋田書店刊



ドル人気を二分していて、僕は風吹ジュンが好きだったの、出してくれと。そしたら山上さんは俺は百恵を出す、と（笑）。そんな乗りで始まったんですよ。『がきデカ』は上から怒られましたねえ。だって一回目は巻頭カラー見開きで、ジャングルジムに乗ったこまわり君が、オシッコしてるんだよ（笑）。しかも包茎のチンチン出して。壁村さんも社長に怒られたみたいだけどね。

それから鴨川つばめさんは当時、「ジャンプ」の専属だったけど、いろいろ制約があつたみたい

で「チャンピオン」に持ち込みに来た。それで何回か増刊や月刊で読み切りを描いてもらったあと、壁村さんに言ったら、連載しようと言われてできたのが『マカロニほうれん荘』。その頃ちょうど僕も鴨川さんも新撰組に凝っていたから、じゃあ「沖田」だ「近藤」だって（笑）。そんなところから始まったんですよ。

「チャンピオン」の全盛期はすごかった。だって飯田橋駅のキオスクに偵察に行ったら、その場で「チャンピオン」の束がどんどんなくなっていくんですよ。それを見たとき、ざまあみろ、と（笑）。ありえないと思ったけど、事実なんだよね。刷つても刷つても売れたから。本当に全国のラーメン屋と喫茶店に「チャンピオン」が置かれるようになった。

どうして「チャンピオン」がそんなにすごい雑誌になったのか、それはよくわからないんだよ。今みたいにマーケティングが通用する時代でもなかったし。ヘンテコリンでおかしな連中が何かぶち上げると、それを応援してくれる人がいたからかな。僕自身、仕事とか職業という意識がなくて。とにかく面白いことがしたい、という意識があつて、ついでにお金がもらえて嬉しいという（笑）。

漫画家と衝突することもあまりなかった。というのも、描いてもらいたい漫画家のところに行つて、「こういう面白いことを考えているけど、あなたならできる」というアプローチをしていたから。それについて納得してもらえるかもれないか。それだけなんです。この漫画家が「チャンピオン」に来たら面白くなる、というプ

ラス思考しかなかった。

いちばん思い入れのあった作品は、あすなひろさんの『青い空を、白い雲がかけてった』かなあ。本当はああいう叙情的な漫画が好きなんです。亡くなっちゃいましたけどね、あすなさん。



自分が生きてきた証を示すために
漫画への情熱をさらに燃やしてほしい

「チャンピオン」は、はなつからメジャーな漫画誌とは違うフィールドで勝負していたと思います。ニツチなところを狙うというか。だから編集者に与えられた裁量がものすごく自由だった。

たとえば、他誌だったら編集長がいてデスクがいて、編集会議があつて、こういう方向性で行こうとか多数決で決めるじゃない。そういう編集会議つて一回もなかったからね。

壁村さんと話していても、馬鹿話ばかりだね。

たとえば「女子高校生」っていう言葉があると、それを「じょしこーこーせー」と表記すると、とつてもいやらしくなる。それだけでウイスキーのボトルを一本空けたくなるじゃない（笑）。そういう話ばかり毎晩。今考えると滅茶苦茶ですけど、それがあつたから、あのとときの「チャンピオン」ができたんだと思う。当時は僕ら「関東壁村組」って言っていましたから（笑）。たぶんあの頃の壁村組は、日本で最強の編集者集団だったんじゃないかな。

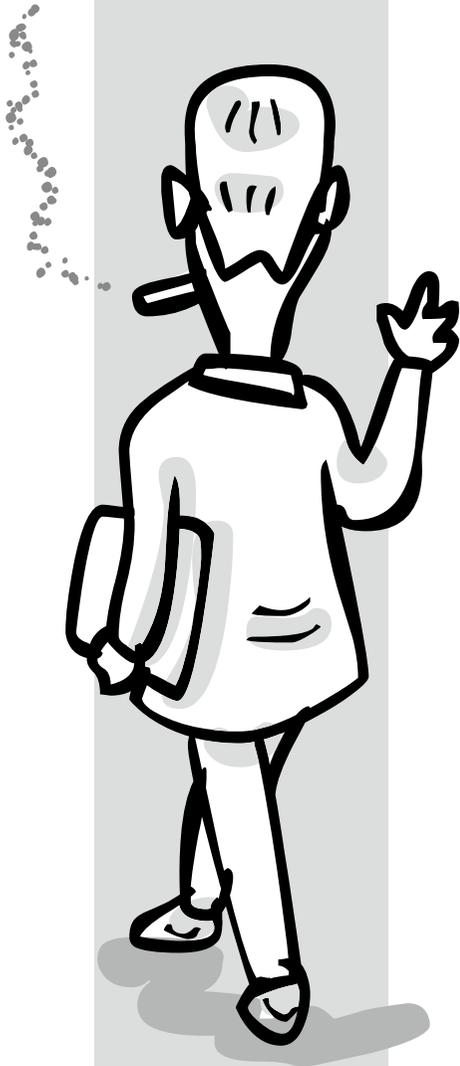
いまはそういう風に漫画を作ることは難しいだろうね。アウトロー的な編集者がいなくなっちゃったから。大手の出版社では、編集者の育成システムができあがっているから、傑出した人じゃなくても編集者になれちゃう。もつと言う

と、編集者に向いていない人でもなれるんです。別にそれを非難しているわけじゃないですよ。時代の流れのせいでそうなってしまったことを言いたいだけ。今の「チャンピオン」もニツチなところで勝負していると思うけどね。編集者の個性で作っているのもわかるし。ただ、悲しいかな、ニツチなものがどんどんなくなっているような気がするんだよね。今の編集者は大変です。

僕ぐらいの年になるとね、自分という人間がどこかに存在していたことを示したくなる。だから、この「新つれづれ草」には注目しています。漫画が描けるということは、ものすごいタレントです。多くの人は、そういう表現手段を持たないで去っていくわけですよ。そりゃあ、漫画を描いていて、売れたとか売れないとか、いろいろあるけど、漫画が描けることは強みですよ。

これまで生きてきたなかで、絶対ひとつやふたつ、確信の持てることがあると思う。それを描いたらどうかと思います。今のところ「新つれづれ草」は、昔描いたことを脚色したり、膨らませたりしている漫画が多いと思うけど、来年とか再来年には変わっていくんじゃないですか。みんな若い頃の情熱の残り火みたいなものがあって、それが何十年か経って、自分の肉体や精神が変わったところに、どうやってちゃんと点火させるか。単なるノスタルジーでやっているわけではないと思うから。

みんな不良中年ですよ（笑）。そうじゃなかったら還暦近くになって漫画なんか描かないって（笑）。



似顔絵
おだ辰夫

●インタビューを終えて

『がきデカ』『マカロニほうれん荘』『ブラック・ジャック』『ドカベン』『らんぼう』『750ライダー』『エコエコアザラク』：思いつくままに挙げてみても、これだけの名作漫画が浮かんでくる「少年チャンピオン」。まさに少年漫画史上の奇跡とも言える時代を担った阿久津さんの説得力ある言葉に圧倒されました。

「新つれづれ草」にとっても、大きな励みになったのではないのでしょうか。こうなったら、どんどん描き続けるしかないですよ、メンバーのみなさん。

文／中島泰司

2010年5月30日

浦和駅西口近くの喫茶店にて